

■ 原著 ■

## 昔話を対象とした談話記述のための枠組み

大野 眞 男<sup>\*</sup>  
(1988年1月20日受理)

Makio OONO

Framework to Describe the Folklores Discourse

昔話などの口承伝承を対象とした談話記述のための枠組みを、D. Hymes などの社会言語学者による言語行動モデルを参考にして、伝承論的レベル(送り手・受け手・状況・媒体)、言語論的レベル(言語体系<副言語を含む>)、テキスト論的レベル(言語の形・話題など)の三つのレベルに大きく分けて設定した。また、昔話のテキストの作成に当たって、言語的情報の他に、談話の流れに沿って、声の限定・声の節目・声の性格・表情・身体動作などの項目にわたって副言語的情報が記述されるべきことを提起した。

〔キーワード〕 社会言語学, 談話分析, 昔話, 副言語, テキスト

### 1. 本論の目的

本論の目的は、昔話の“語り”の談話構造を分析する場合にどのような点に留意して記述を行っておくべきかということを検討することである。単に一回一回の昔話の語りの正確な記録を残すという目的であれば、テープレコーダーはもちろんのことビデオ装置を用いれば音声とともに映像をも記録することができる。適正な状況のもとにそのようにして記録された映像は資料としてたいへん貴重なものであることは言うまでもない。本論で検討する昔話の談話記述についても第一次的な資料としてそのような記録を作成することから

始めなければならないのだが、次なる談話の構造分析のための記述の段階において必要とされる情報はすべてこの段階においてあらかじめ記録されていなければならないことになる。従って、第一次的な資料を作成する前に、言語的コミュニケーションとしての昔話の一般的性格、昔話の談話記述に際して想定される記述項目などの点についてある程度大づかみな輪郭を描いておく必要がある。

また現代社会においては、昔話がかつてのように炉端で語られるということはほとんど見られなくなり、記録・編集された昔話集として、あるいは国語教科書の中で再話教材として、文字化されたものになってきている。テレビ・ラジオなどの

\* 岩手大学教育学部国語科

視聴覚メディアの発達は更に大きく昔話をめぐる状況を変えつつある。そのような多様な現代的状況をも考慮に入れつつ、口承伝承という言語的コミュニケーション全体の変容をどのように記述したらよいか、併せて検討していかなければならない。

## 2. 言語的コミュニケーションの枠組み

人間の行う言語的コミュニケーションには多様な要素があり、またその果している機能も多様である。昔話という談話行為は、その要素と機能という観点に着目すると、言語的コミュニケーション全体の中でどのように定位づけることができるだろうか。

言語的コミュニケーションの要素と機能については、R. Jakobson の考え方がよく知られている。言語行動の成立要素を、送り手 (addresser)・受け手 (addressee)・内容事物 (context)・発話 (message)・言語体系 (code)・接触 (contact) の6要素を考え、それぞれに対応する機能として、心情的 (emotive)・動能的 (conative)・関說的 (referential)・詩的 (poetic)・メタ言語的 (metalingual)・交話的 (phatic) の6機能を立てるものである (Jakobson 1960)。

また、この Jakobson の考え方を基本として、人間の言語行動全体をひとつの event として記述する立場から考えられたものに D. Hymes に代表さ

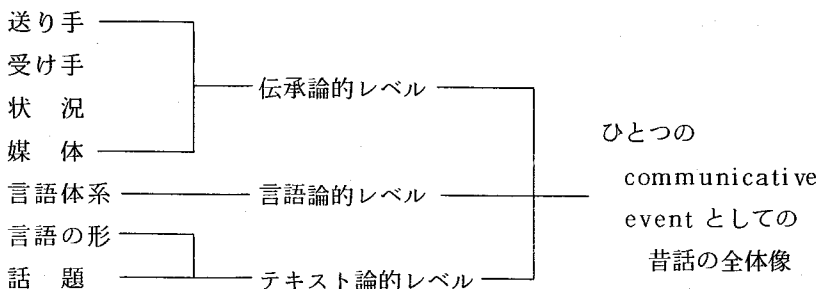
れる社会言語学者達による考え方がある。言語行動の成立要因として次の7つのものを考えている。

- 送り手 (sender)
- 受け手 (receiver)
- 言語の形 (message form)
- 媒体 (channel)
- 言語体系 (code)
- 話題 (topic)
- 状況 (setting)

そしてそれぞれの要因に対応する機能として、感情表白の機能 (expressive)・働きかけの機能 (directive)・詩歌の機能 (poetic)・接触の機能 (contact)・ことば自覚の機能 (metalinguistic)・ことから指示の機能 (referential)・状況優先の機能 (contextual) の7機能を立てるものである (Hymes 1968<訳語は林1978によった>)。この考え方は、あたかも記述言語学において音声を調音上の特徴によって構造的に把握するのと同様にして、すべての言語行動をその設定された要因に照らして分析的・相関的に記述する尺度として考えられている。(Hymes はその後このモデルを増補・細分しているが、基本的な視点は変わっていないと考えられる。)

Hymes によって提示されたこの考え方は、昔話のような口承伝承の記述を目的とした場合に、表1に示すように伝承論・言語論・テキスト論の3つのレベルに再編成してとらえなおすことができるだろう。

表 1



Hymes の設定した7つの要因と言語行動としての昔話の全体像を、3つの中領域を設定することによって有機的に結びつけることができる。また、この伝承論・言語論・テキスト論は、コミュニケーション論で言うコンテクスト・コード・テキストの領域とそれぞれ符合している。この枠組みにおいて、昔話の“語り”のもっている談話行為としての性格とその記述のための細目について考察する。

### 3. 昔話における伝承の枠組み（送り手・受け手・状況・媒体）

送り手（sender）と受けて（receiver）はコミュニケーションの参加者についての問題であり、状況（setting）はコミュニケーションが行われる時間と場所の問題である。また媒体（channel）はどのような手段を使ってメッセージを伝えるかという問題である。これらはいずれも談話行為に対して物理的前提を成している要因であり、昔話の伝承論的な枠組みを構成している。一般的に、“昔話”と言えば、語られた結果の文字化されたテキストのみを指すことが多いが、実際には昔話は口から耳へそして耳から口へと話し言葉として伝承されていくものである。そこには必ず、送り手と受け手と状況と媒体（誰が・誰に・いつ・どこで・どのように）という要因が必須なものとなっている。昔話の談話記述に当たっては、“昔話”を、語られた結果のテキストと考えるのではなく、このようなコンテクストの部分も含めて人間主体によって営まれる一つのcommunicative eventとして記述していく必要があるだろう。

昔話における送り手は“語り部”と呼ばれる。日常の言語行動においては送り手について特に制限がされないのに対して、送り手に明確な制限のされている言語行動がある。説教・法話・講義・落語・漫才などのように職業的に規定されているものもあれば、ある種の儀礼の中で認められるよ

うな口上・祭文などのように社会的・宗教的に規定されている場合もある。昔話の場合も、職業ではないけれども“語り部”という社会的に規定された口承伝承者にその送り手が限られていることが多い。但し、語り部の規定は厳密なものではなく、伝承社会の成員ならば潜在的に誰でもが語り部なのである。現実には、若い頃から受け手（聞き手）として積極的に参加してきた者が中年を過ぎてから送り手（話し手）と立場を変えていくというのが、伝承における語り部の基本的な生成パターンであろう。昔話の談話記述に当たっては、語り手の年齢・性別の他に生活歴、特に送り手となる以前の受け手としての歴史について聞き取りをしておかなければならないだろう。

昔話の受け手について考える場合にも、送り手と受け手が共に伝承社会を構成しているという視点が重要なものとなってくる。相手の誰れ彼れを構わずに昔話が語られるのではない。言語学においてスピーチ・コミュニティが考えられるのと同じ様に、伝承の基盤となる共同体が存在している。昔ながらの語りの場面であるなら、語り手の子や孫や近所の子供が受け手であったろう。記述に際しては、聞き手の人数・年齢・性別などももちろんのこと、聞き手は語り手に対してどのような社会的関係にあるのかにも注意を向け、その場における伝承の共同体がいかなる性格のものかを確認しておく必要があるだろう。

なお、参加者同士の間の言語的コミュニケーションによる情報の流れをネットワークと称するが、ネットワークには、一定の送り手から一定の受け手へ一方的に話が行われる“独話”と、送り手と受け手が交代してその都度情報の流れの方向が変わる“対話”とに形式的に分けられる（国立国語研究所1987などによる）。昔話の場合前者に属することはもちろんであるが、4. 昔話の言語論で後述するように広い意味では言語（code）に含められる、視線や相づちなどの周辺的な副言語（paralanguage）によるコミュニケーションを考える

ならば、昔話においても対話的ネットワークを想定しうることを忘れてはならないだろう。ビデオなどを用いて映像資料を作成する場合には、語り手はもちろんのこと聞き手の paralinguistic な行動も複数のカメラを用いて記録されなければならないだろう。

昔話が行われる状況についてはどのような時間的・空間的制限が見いだされるだろう。時間的なことについては、年中行事や人生儀礼などとの結びつきに注意する必要があるだろう。単に時間的ということならばしばしば昼間に昔話を語ることが忌まれるが、あるいは単に苛烈な労働環境に由来するだけのことなのだろうか、他の儀礼的言語行動にみられるような強い制約には感じられないようである。空間的なことについては、語りの行われる場所と、語り手と聞き手との間の距離・位地関係とが問題となる。昔ながらの語りにおいて場所は語り手の居住する家の炉端や炬燵などが選ばれることが多いだろう。距離・位地関係については、聞き手は語り手の前面を囲むようにして、どんなにひそやかな声づかいも聞き漏らさぬ程度の距離を保つだろう。

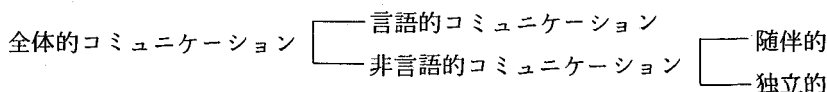
昔話の語り際に際して選択されるコミュニケーションの媒体は、いわゆる“直接の話し言葉”である。送り手・受け手が面と向かっての話し言葉は、言ってみればゼロの媒体であり、あらゆる媒体の中で最も始原的・基本的なものであろう。近年のメディアの多様化により、直接にはこの昔話の“媒体”という点に関して大きな変動を蒙っている。4. 昔話の言語論で詳述するように、昔話に使用される言語は狭い意味での言語そのものと周辺の副言語とからなっているが、テープレコーダ

ーなどの媒体によって録音された記録は、語り手の演ずる副言語的な情報の多くが欠落したものとなっている。“文字”という媒体による多くの出版物も、同様に副言語的な情報の多くが欠落しているばかりでなく、送り手・受け手・状況・媒体からなる伝承論的レベルの情報もその多くが欠落してしまっていることは言うまでもない。テレビ・ラジオなどの昔話番組や、昔話を素材にした絵本（これについては親が子供と一緒に絵を見ながら語り聞かせることもあるという）などについても、“媒体”の変更が、伝承論的・言語論的・テキスト論的なそれぞれの次元でどのような全体的変容をもたらしているのか検討していく必要があるだろう。

#### 4. 昔話における言語の枠組み

言語体系 (code) については、コミュニケーションにおけるメッセージをどのような言語のヴァリエティーで送り手が形成し受け手が解読するかという問題であり、昔話の言語的枠組みを構成している。5. で論じるテキスト論レベルの素材となっているものである。ここで言語体系 (code) と言っているものは、日本語とか英語とか言うように狭い意味での言語 (language) のみを指すのではない。談話行動にともなって現れる抑揚や相づちなどのようないわゆる副言語 (paralanguage) とか、赤なら止まれ青なら進めというような信号体系をも含めて言語体系 (code) と言っているのである。南不二男は林四郎の考え (林1973b) を基にしてコミュニケーションを表2のように分類している (南1977)。

表2



非言語的コミュニケーションの随伴的なものは、「なんらかの言語的コミュニケーションを前提として、それにともなって現れるもの」であり、独立的なものとは、「言語的コミュニケーションとはかわりなく、それだけでも現れることができるもの」を言う。南も指摘するように、言語的コミュニケーションに随伴的か独立的かという点は微妙な問題であるが、従来副言語と呼ばれているものは、言語的コミュニケーションに随伴的な非言語的コミュニケーションにおけるコードと規定することができる。昔話における語りも、南の言う言語的コミュニケーションと随伴的・独立的な非言語的コミュニケーションから複合的に構成される一つの全体的コミュニケーションである。

#### 4-1 言語

南の言う言語的コミュニケーションのコードとなっている狭い意味での言語 (language) は、送り手と受け手すなわち伝承社会の成員の間に共有される言語能力である。昔話の語りの場合、通常は方言がこれに使われることが多いが、受け手が伝承社会の成員でなかったり、状況のセッティングが変わったりした場合には、いわゆる共通語が混用されることが多くなっていくだろうことが予想される。また媒体が3.で検討したように変わってくることによって、共通語が使われる蓋然性が高くなっていく。これらの共通語使用については、伝承論レベルの各要因との相関のもとに社会言語学的なアプローチが必要であろう。

昔話の語りにおける使用言語である方言の体系

は、昔話の記録とは別個に音韻論 (アクセント論を含む)・形態論・意味論 (構文論・語彙を含む) の各レベルにおいて周到に記述されていなければならない。音韻論は、4.2.で後述する副言語を狭い意味での言語と切り離して認識するために必須の作業である。ことにアクセントにおける形態音韻論は、副言語としての抑揚やリズムなどの問題を正確に把握するために欠くことができない。また形態論・意味論の記述は、5.のテキスト論的レベル問題を考察していくときの重要な鍵を提供することになる。

#### 4-2 副言語

南の言う非言語的コミュニケーションにおいても、送り手と受け手の間にコミュニケーションが成立するということは、そこになんらかのコードが存在していることを示している。但しどのような表現がemicなコードとしてコミュニケーションに関与的であるのかということは今後の記述的研究を待たねばならないので、昔話記述に当たってはとりあえずできるだけ細かくeticな表記をしなければならないだろう。また、南の言う言語的コミュニケーションに随伴的か独立的かという問題も、具体的な記述の中ではじめて区分できる部分が大きいと思われるので、昔話の談話記述に当たってはとりあえず区別せずに記述していく姿勢が必要だろう。

南は林四郎の考え (林1973) を参考にしながら、話し言葉とともに現れる副言語として表3のような範疇を想定している (南1977)。

表3

- 1) 聴覚的 各種の間投音, 声の質, 言葉の調子, 沈黙, 物理的な音
- 2) 視覚的 顔の表情, 身振り・動作
- 3) 聴覚-視覚的 (声を伴う笑い・泣きなど)
- 4) 触覚的 (握手・抱擁など)
- 5) 時間的 (沈黙の時間の長さなど)
- 6) 空間的 (相手との距離の取り方など)

これらの中で空間的なものについては、昔話の談話記述の場合、伝承論レベルの状況 (setting) の要因と重複するところが大きいと思われるが、語り手が身体動作の一環としてなんらかの効果を伴って聞き手との距離を微妙に調節することが考えられる。また、昔話の場合、触覚的なコミュニケーションを想定する必要はないだろう。

副言語 paralinguage のコミュニケーション全体における位置づけについては G.L.Trager にも包括的な論考がある (Trager1964)。Trager は言葉によるコミュニケーションの全体を表4のような範疇に分けて示している。

表4

Voice set [precedes]  
 Speech [which includes]:  
 Paralinguage [divided into]  
 Voice qualities [and]  
 Vocalizations  
 Language. [the whole accompanied  
 by]  
 Kinesics

Voice set は言語的コミュニケーションの前提となっている発話者の“声”そのものについての生理的・物理的特性である。(これは語り手の属性と考えられるので本論の視点では言語論ではなく伝承論レベルの問題となる。) Speech は Paralinguage と Language から成り, Paralinguage をさらに Voice qualities と Vocalization とに分けている。また Speech 全体にとまなうものとして身体動作などの Kinesics を考えている。(先述の南の考えと異なり, Kinesics は聴覚的な Paralinguage とは別のものと規定されているが, 身体動作などにおいても言語的コミュニケーションに随伴的なものと独立的なものが存在することを考えると, 南のように両者は連続的な性格をもっていると想定する方が実践

的な考えであろう。)

Trager は上述のように paralinguage について聴覚的なものだけに限っているが, その記述項目については詳細な検討を行っている。その下位範疇の一つである voice qualities (全体的な声の調子) は, 発話者が現実にとどのような声の質を選んでその語り全体に臨んでいるかということであって, 楽譜でいえば曲想のようなものがこれに当たる。ピッチの幅の大小, 声の粗さ, ピッチの上げ下げのスムーズさ, 調音の几張面さ, リズムのスムーズさ, 声の響き, テンポの速さなどの項目があげられている。昔話の場合, 明らかに通常の発話とは異なるものをもっていると思われる。

Paralinguage のもう一つの下位範疇としての vocalization (声使い) は, 談話のその場その場における声の使い方に関することであり, 次に略述する更に3つの下位下位範疇に分けられている。第一は vocal characterizers (声の性格) であり, 声にとどのような表情をつけているかということである。大きく, laughing・crying・yelling・whispering・moaning・groaning・whining・breaking・belching・yawning などの項目が設けられている。第二は vocal qualifiers (声の限定) であり, その場その場で改変される声の大きさ, 高さ, 速さについての項目が設けられている。第三は vocal segregates (声の節目) であり, ポーズ (沈黙) も含めて発話の切れ目に現れる間投音について規定している。

身体動作・表情などについては, 江川清(1978)・杉戸清樹(1978)・国立国語研究所(1987)などに詳細な記述方法に関する論考があり参考となる。身体動作の場合は特に, 何が言語的コミュニケーションに随伴的か独立的かという先述した問題の区別がつきにくい範疇である。昔話の記述に際しても, なるべく細かな観察を心がける必要がある。また, 副言語の全ての項目にわたって, 偶然的か意図的か, なんらかの communicative

valueをもったものなのか、それぞれの項目間の相互関係はどのようなもののかなどといった点について、5.で論じるテキスト分析と同時に進められなければならない。

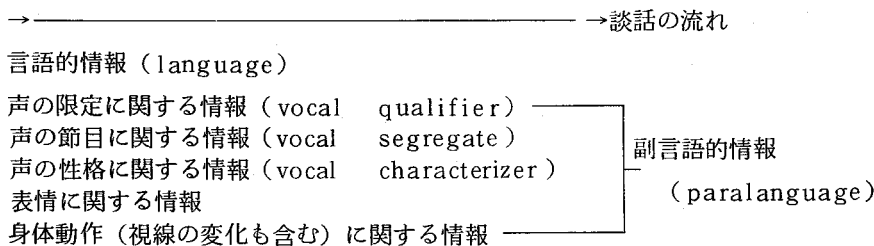
### 5. 昔話におけるテキストの枠組み

テキストレベルに含まれる要因として、メッセージの形 (message form) と (topic) があげられる。メッセージの形は、語り手によって行われた談話がどのように一つの昔話として織りなされているかという問題である。話題は、個々の文における主題からはじまりテキスト全体における主題を考えるべきものである。池上嘉彦は、談話におけるテキスト性を支える構造的要因として大きく3つのものをあげている (池上1982)。結束

性 (cohesion)、卓立性 (prominence)、全体的構造 (macrostructure) である。結束性と全体的構造の問題は Hymes のメッセージの形という要因に相当し、卓立性の問題は Hymes の話題の要因に含まれるだろう。

なおテキストは、コードを直接の素材として構成されている。4.において考察した昔話の語りにおける、南および Trager による諸々のコードを参考にすると次のように記述されるべきだろう。昔話の談話としてのテキストの全体は、まず全体的な声の調子 (voice qualities) が記述される。そして表5に示すように、談話の流れに沿って言語・副言語の各項目に並行的に注意を払うことによって記述され、談話のテキストとして再構成されるものを分析の対象としなければならない。

表5



#### 5-1 メッセージの形

まず昔話がどのような手段によって、単にばらばらの文の集まりでないということ、つまり結束性 (cohesion) が保証されているのか確認をしなければならない。池上 (1982) は、言語的テキストの結束性の表示手段として、指示、置換・省略、語彙的手段による結束性、接続詞の4つの種類を想定している。指示とは主として代名詞による既出情報の内容的な照応、置換・省略とは既出情報の表現部分における引き継ぎ、語彙的手段による結束性とは同一・類似語句の繰り返し、接続詞は文字どおり文と文との間の言語的記号のことをそれぞれ指している。

このような結束性に表示については、林四郎の“文の姿勢”に関する考え方も参考にしなければならない (林1973a)。林は、文章を構成する文を始発型・承前型・転換型・自由型の4つに分け、それぞれの文の中にその型を示す言語的記号・要素が存在しているとしている。この考え方は主として言語的テキストについて述べられたものであるが、副言語についても、このような始発記号・承前記号・転換記号としての機能を考えていくことができるだろう。

また林四郎は、日本語の文の構造について四重の層構造を想定している (林1968)。事物認識の仕方を示す描叙の層を中核として、その外側に判断

の層、心情表出の層、相手への接触態度を示す伝達の層が入れ子型に構成されている。これらの中で、描叙の層を包みこむ判断・表出・伝達の三層の表現は、文末部の助動詞・助詞や副詞・感動詞・呼掛けなどとして表されていることが多いが、これらがどのように昔話のテキストの中で分布しているのかを確認することは、語り手・聞き手の間で交わされるコミュニケーションとしての“語り”の性格を知る上で重要なことである。また副言語に関しても、この林の四段階の機能を想定することができるだろう。言語的コミュニケーションにおけるそれぞれの層に対応して、あるいはそれを補完する形で、様々な項目の副言語によってこれらの層に相当する機能の表現がなされ、一つのテキストの全体として複合的に織りなされているのである。

テキストの全体的構造（macrostructure）であるが、これは内容的な観点からテキストの完結性を保証するものであるが、一般に起承転結と呼ばれているものに相当する。形式的には、昔話は「昔々あったずもな……どんとはれ」というような初発句・終結句や副言語による額縁構造をもっているが、内容的な観点でその全体構造を把握するのは、談話分析の視点からは難しい作業となるだろう。少なくとも5-2で述べる話題の要因からの分析を積み上げることによって、昔話のモチーフ構成をはっきりさせた上で一般化が許される作業となるだろう。

## 5-2 話題

Hymesのいう話題（topic）の要因に相当すると思われるものとして、池上（1982）の卓立性が考えられる。これはテキストの中のどの部分を際立たせて提示するかという問題である。池上は卓立性に関することとして、主題、既知・新出、視点の項目を考えている。

主題（theme）とは、文の中でそれについて何かが述べられる部分であり、叙述（rheme）すな

わち何かについて何かを述べている部分と対立するものである。既知・新出とは、その情報がテキストの流れの中で話し手と聞き手の共通のものになっているかということである。テキストのすべての表現を主題と叙述に分けて、主題の部分の流れを追っていくこと、また既知と新出に分けて新出の部分の流れを追っていくことは、テキストのtopicの流れを考える上で裏腹の関係にある二つの方法と言えるだろう。昔話の場合、日常の会話において散漫となる傾向にあるのと異なって、なんらかのまとまりのある流れを持っていると思われる。

視点は、語り手がテキストを語る時にどのような立場に立っているのかということである。視点表現は時間的・空間的な視点を持つものと共感的な視点を持つものとに分けられる。時間的・空間的なものは、「来る・行く」などの表現によって表される。共感的なものは、「あげる・くれる」などのやりもらいの表現によって表されている。この問題は、語り手が直接に登場人物の目を通して語っているのか、同情的な立場で語っているのか、あるいは単に中立的な立場で語っているのかという問題を提示しており、テキスト全体の主題を考える上で重要な手がかりとなっていくべきものである。

## 6. その他

以上本論で検討したことのほかに重要な問題として、談話の単位の問題がある。南不二男は、どのような基準によって談話の単位が設定されるかということについて、談話の形・参加者・話題・機能・表現態度・使用言語・媒体・構造のそれぞれの観点から、その談話としてのまとまり・切れ目を考察している（南1982）。その結果として一般的な日常会話では、ある点に関して談話の連続性が切れているかも知れないが別の点では連続していることが多いものであると述べている。とこ



ろが昔話の場合はそのような傾向を示さないであろう。南の用いた観点とは少し異なるが、本論で記述の項目とした Hymes の 7 要因で考える限り、昔話はどの要因を比べてみても一致した切れ目・連続性を示すのではないだろうか。そしてどの項目においても特別の制限が存在することがわかる。その制限すなわち形式を、本論で設定した各レベル・各項目において記述することによって、昔話の communicative event としての全体像を把握することができるだろう。

(本稿は昭和62年度文部省科学研究費補助金〔一般研究B課題番号62450034〕による成果の一部である。)

#### 参 考 文 献

- Brown, G. & Yule, G. 1983 *Discourse Analysis* (Cambridge)
- 千野栄一 1980 「ことばの芸術と芸術のことば」(『講座言語4 芸術の言語』大修館)
- 江川清 1978 「身ぶりの記述について」(『国立国語研究所報告集』1)
- 林四郎 1968 『基本文型の研究』(明治図書)
- 林四郎 1973 a 『文の姿勢の研究』(明治図書)
- 林四郎 1973 b 「表現行動のモデル」(『国語学』92)
- 林四郎 1978 『言語行動の諸相』(明治書院)
- 林四郎 1979 「言語行動概観」(『講座言語3 言語と行動』大修館)
- 林四郎 1982 「日本語の文の形と姿勢」(国立国語研究所『談話の研究と教育I』)
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. 1976 *Cohesion in English* (Longman)
- Hudson, R. A. 1980 *Sociolinguistics* (Cambridge)
- Hymes, D. 1968 *The Ethnography of Speaking* (*Readings in Sociology of Language*, Fishman, J. A. ed., Mouton)
- Hymes, D. 1974 *Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. (Tavistock Publications) (唐須教光訳1979『ことばの民族誌』紀伊国屋書店)
- 池上嘉彦 1982 「テキストとテキストの構造」(国立国語研究所『談話の研究と教育I』)
- Jakobson, R. 1960 *Linguistics and Poetics*. (川本茂雄他訳 1973 「言語学と詩学」『一般言語学』みすず書房)
- 国立国語研究所 1987 『談話行動の諸相 座談資料の分析』(三省堂)
- 南不二男 1976 「視覚材料と文章」(『現代作文講座 作文の基礎』明治書院)
- 南不二男 1977 「言語行動と副言語」(『日本語と文化・社会3』汐文社)
- 南不二男 1979 「言語行動の問題点」(『講座言語3 言語と行動』大修館)
- 南不二男 1982 「談話の単位」(国立国語研究所『談話の研究と教育I』)
- 永野賢・林四郎・南不二男・(司会) 樺島忠夫 1984 「シンポジウム記録文章論の開拓」(『国語学』139)
- ネウストプニー J. V. 1979 「言語行動のモデル」(『講座言語3 言語と行動』大修館)
- 西江雅之 1980 「口承伝承の記録」(『講座言語4 言語の芸術』大修館)
- 杉戸清樹 1978 「身振りを記録する——変異の記録表試案——」(『国立国語研究所報告集』1)
- Trager, G. L. 1964 *Paralanguage: A First Approximation* (*Language in Culture and Society*, Hymes, D. ed., Harper & Row)